

# 汲古一

## 「歌集・境涯を前にして」(二)

中村素堂

人間の葛藤はどこにもあることで珍しくはないが、女学校はいやだとむかしの先輩にいわれたために、及び腰で勤めている私などと違い、先生はほとんど生涯をかけて愛し勤めてこられたのであるから、この時はお苦しみなられた筈だと思っていた。

私はこのような期に清水先生を見、その後は篁のお仲間に入れてただいて、先生を中心とする短歌の世界で先生に接触しながら、いろいろと有り難い示唆を蒙っているのである。

したがって、いまこの歌集『境涯』を頂戴して、濃いブルー一色の装幀見返しの中尊寺の華鬘の薄刷りなど、前の『薰染』と比べて先生の趣向も大きく動きを示しておられるのを知った。そして一卷二百六頁の跋語までを一気に拝見してしまつた。

長い感想など書いていると時間がかかるから、短歌みたくなものが速くてよいという主義で、ずぶの素人を看板にし看板に偽りのないように心がけて作歌をしている私などは、つくづく玄人の歌のうまさというものを、それから懸命に勉強している人の偉さというようなものを、歴然と示されて策励のきびしいものを感じざるを得なかつた次第である。

一首一首にいのちをかけている心の深さが、ずっしりと重みを作り、描写のたしさが具象に一段の鮮やかさを加えて、芸術する人の態度というものを考えさせられるのでもある。

この態度ということで、一卷を通じて気づくのは、一本通つた烈しいものが根底にあつて、それに文学への造詣と手厚い推敲が、積み重ねられての成果なんだな——と首肯するのは、側面から見ていた先生の教員生活における挙措の中にも、年少の時に学問に志された態度の中にも、これがあつたからこそ境遇の凜然として処してこられたのであろうと見るものである。

冒頭に書いたこと考え合わせて、先生のこの五百首の中で、最も

体験に私が共鳴してしまふものは、教育の場にあつてその信条を維持するための反省や、

女教師らの発言活発になりたれど踏み込みて言うはなほし稀なり  
再建の校舍美し少女等の裡かかる豊けさに充たされいむや

踏みにじるむごき圧力はね返す雑草の強さわれは持ちたし  
信じ得ぬ人を信じるごとく見せ欺くて淋しき日々が過ぎゆく

秋の野に一人来りて忍従に湿る頭骸を陽に干してゐる  
何も云つてはならぬ職場にて時過しゐる一日か今日も

面かぶりおほせば立派なる教師よといひたる人もすでに死ににき  
体裁のよきことばかり並べられ語はれる場も多く見き

のようなうつつとしかつた往年の生活現場の中で、現実の醜さを見つめている姿のもので、これは同じ場を見ていたことと、どの職場にも多少似たものを私は感じとつていっているせいであるうが。歌壇の錚錚たる方々や同人の先輩の精緻なご批評もあつて、先生の歌は立派に鑽仰しつくされているので、その幽玄の趣取、描写の妙などこのとは蛇足にさえ足らないので、すっかり遠慮させていただきます。短歌もまた人であつて、先生のような信念堅固な精進のきびしい人であれば作られないものに充たされている。

しかし何といつても私は先生の幽玄な静かなものの方に多く惹かれるのであるが、これはまた素人の言及する範囲のものではないと思つている。  
〈「たかむら」昭和四十二年十一月

空外	奩	秋	意
蟋蟀	呼	應	遠
葉	任	西	風
秋	意	今	宵
			暮
			月
			中

貞香山房詩鈔「空外奩秋意」